

五化目桂文校
いちもん新聞

令和8年9月 第133号

世界平和
災害復興
健康長壽
笑壳繁昌



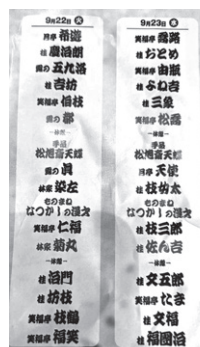
五代目文枝



玉出はんなり亭



当時の三枝会長(現六代文枝)が、車夫となり三代目春岡治師匠を人力車にのせて…



文珍・樂珍師弟



四代小文枝



巨人 阪神さんと



六代文枝 独演会



二十周年を迎えたぽんぽ娘



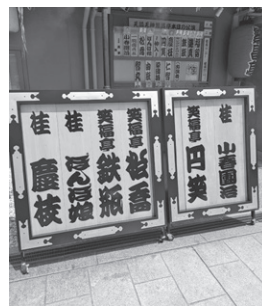
名古屋場所 あやしい? 観客



阿武剋関 激励



舟寺神社 寄席



繁昌亭 看板

○祝繁昌亭二十年

天満天神繁昌亭が、9月15日で開席丸20年を迎える。前日の14日には20年前のオープン当日のように上方落語協会員によるお練りが行なわれ日本一長い天神橋筋商店街から大阪天満宮（天神さん）を練り歩く。15日から23日までは、二十周年記念公演が行われる。その準備のための大改修工事（メンテナンス）が行なわれるため8月24日から9月14日までの3週間、繁昌亭は休館。今まで、コロナ禍で休館とか毎年の彦八まつりの2日間は休館となってるがこんな長期閉めるのははじめて。そこで、ななめ前の喫茶ケルンさんが夜6時の営業終了後、お店を開放して下さり「ケルン寄席」としてなじみの嘶家、芸人がミニ寄席を開く。一門ではぼんば娘や雪鹿もユニークな会を催し9月1日は、文福が一座のギター漫談キングダムけんたの応援をうけ「お笑いジंक、オンドシヨ」を開催する。

○六代文枝83才独演会

今年の7月16日に83才になった六代文枝が落語生活60周年の記念もかねて、なんばグランド花月で、毎年恒例の独演会、今回はあえて前座をつかわず映像で今までの芸能活動を紹介し、自身で創作落語を三席熟演。一席目は初期の作品「にぎやか寿司」。続いて「じいちゃんホスト」。さらにおどろくべきは、最新のブームAIを題材にした「AI（愛）からはじまる」。映像とあわせてのやりとり等83才とは思えぬ新たな挑戦にはおどろくばかり。ゲストは吉本の大御所漫才師2組、巨人阪神のご

両人とザ・ぼんちのご両人。この2組とのトークも、大いにもりあがった。

○四代小文枝

ユーチューブで大好評

吉本興業公式ユーチューブで「男がしゃべりで何が悪いねん」喫茶店の隣から偶然きこえるひそひそ話をコンセプトに四代小文枝が仲間の芸人らと好き勝手にしゃべる番組が大人気。ぜひご視聴下さい。

○文珍8・8デー44年連続公演

文珍の恒例の8月8日の独演会。今年は令和8年8月8日。まさにハッハッハと笑える日。なんと44年連続公演なんばグランド花月は大人満員。ゲストは江戸より春風亭小朝師匠。文珍は新作、古典の二刀流。特に珍らしい大ネタ「帯久」大熱演で大きな感動を与えた。

○玉出はんなり亭 定着

我々、五代目文枝門弟の修行の地、西成区玉出。今は亡き師匠ご夫妻、おやじ、おかみさんが居ないと足が遠のくのではと、文福が発案し地元玉出本通商店街の皆さんのご協力を得て2ヶ月に一度、7月5回目を迎えた。今まで文太や枝太、坊枝、あやめらが出演し毎回五代目文枝の孫小きん（小文枝門下）が開口一番、7月の「文福ぼんば娘たぬき親子の化かし合い」では大人満員。これから

一門の聖地として、おやじの芸風「はんなり」を冠した「玉出はんなり亭」よろしゅうお願い申し上げます。ちなみに次回は9月28日小きん、阿か枝、文三が出演。

まめだの無口なたぬき

時をかけるテレビ、手塚治虫、創作の秘密1986年放送を見た。大阪府豊中市出生、兵庫県宝塚市出身。本名手塚治。幼い時から虫が大好きでオサムシからペンネームを手塚治虫に。鉄腕アトム、ブッダ、火の鳥、ブラックジャックと多数あり15万ページ700タイトルに及ぶ、連載に追われて続けているのはバカじゃなきゃできないと語る。続けているのは出来た時の開放感、平和を求める心だそうです。司会の方とゲストの人が30才の年の差、手塚マンガの話で盛り上がり時をかけています。

文也の分野

この新聞が発行される9月上旬といえはかつては朝夕は涼風も吹き、里山ではトンボが舞い稲穂は実り秋の訪れを感じるのが日本の季節感だ。それがどうだ9月はまだ普通に夏だ。エアコンガンガンかけてステテコでアイス食って、高座の着物は10月いっぱい組で、街中でトンボは舞わず、涼風も吹かない。この日本で涼風なんてものは宝塚スターの名前の中にしかない。なんとかせにゃならん、地球を救わねば。

実は最近TVの映像特集番組でやたらUFO物が多いことにお気づきだろうか。それだけ世界中で

目撃・撮影例も多く、アメリカ航空宇宙局や米軍も過去に撮影した映像をバンバン放出してる。さらに10月公開のスピルバーグの新作映画はあの「未知との遭遇」の続編とも言えるUFO/UAP物なのだ。絶対に宇宙人と遭遇してるって言われるスピルバーグが新作で取り上げたと言うことは、そろそろ

やな…いや決まってるがな!! 未知との遭遇やがな。とうとう宇宙人が人類に公式に接触をするのだ。そして宇宙人がトランプやプーチンやネタニヤフに正義の鉄槌を下し戦争を終わらせ、ウクライナやガザを元通りにし、蛇行する偏西風を真っ直ぐにし、エルニーニョを解消し、南極や北極の水を増やし、地球を覆う温室効果ガスを吹き飛ばし地球を冷やす!! さらに高市を退場させ、都構想をも一回否決し、繁昌亭に客を誘導し、落語家に美味しい余興を発注し、ウチの古いエアコンを交換し、後……えっ宇宙人どっか行った？

白鹿のはくはくしかじか

落語会に来てくださるお客様で、貴重な美術品をたくさん収集している方がいる。その方が先日、円山応挙作「白鹿図」の掛け軸をお持ち下さった。貴重な物すぎてちびりそうになっている所へさしてこの方が衝撃の一言を発する。「白鹿さん、これあげますわ。」はい？ そんな何十万何百万するような物をおいそれと頂くわけにはいかない。当然、めっちゃくちやお断りした。が、長くお話しした結果、頂く事になった。はい？ 世の中には凄い人がいる。太すぎる腹の人がいる。簡単にあげれます？ そんな物を。夢見心

地にいると、最後にこの方がさらに衝撃的な発言をした。「白鹿さん、私は本物やと思ってますが、鑑定には出していないので偽物かもしれません。」はい？

文喬のぶんきょうチック

地下鉄に乗っていた時の事。優先席におばあさんが座っていた。その隣に座ってる若い男性が携帯をいじっている。その前に吊革を持った若い女性が生きていた。それを見たそのおばあさん、隣の若い男性に聞こえよがしに前に立っている女性に「お姉ちゃん、妊娠してるんちゃう？」と大きな声で問いかけた。その若い女性、何も云わずに黙っていた。隣の若者、知らん顔してまだ携帯をいじっている。おばあさん、もう一度大きな声で「お姉ちゃん、アンタ、妊娠してるんやろ」と。その若い女性今度ははつきりとした口調で「妊娠なんかしてません」と言いよった。するとおばあさんも負けずに、「その体つき、絶対妊娠してるわ」「結婚してないのに妊娠してません」と言い放って次の駅で降りて行った。「結婚してのうても、妊娠できるんやんか、なあ」と誰に云うともなしに独り言を云うてた。最初は親切心で云うてたのにいつの間にか妊娠してるかどうかに話がすり替わってしもて傍らで聞いてておもしろかった。こんなこともあったなあ。これも地下鉄での事。ドアの処に大きなキャリアバッグを置いてるのを見た男性が「おじさん、そんなとこに大きなキャリアバッグ置いてたら乗り降り

できひんで」と云われても知らん顔してる。無視されたのに腹立ったんかな、強い口調で、「おい、おっさん、聞えてないんか、荷物が邪魔で乗り降り出来ひん云うてんねん、なあおっさん。」と云われて、カチンときたのか「私は女です。おっさんちやう」と云い残して次の駅で降りて行つた。残された男性「どう見てもおっさんやんか、なあ。ホンマに失礼な奴ちやで」。アンタが一番失礼や！

枝女太の「和」のころ

前号で、以前は「百姓」が、放送禁止用語だったことがあるという事を書きました。問題は、なぜ百姓という言葉が放送禁止になったのかという事なのですが、私は学校の歴史教育のせいだと思つています。私が、中学の頃に習つた歴史で、先生は「江戸時代は「土農工商」という身分制度があり、百姓は、年貢で徹底的にしほり取られて自分で作つた米を自分達が食べられず、ヒエやアワを食べていた。これは幕府政治という独裁政治が招いた事、現代の様な民主政治が一番良いんだよ」ということを言うためでしょうが。そのために百姓が必要以上にじめに描かれた。時代劇などでも、そんな扱いでした。それで、我々の世代は完全に洗脳されてしまったのです。百姓や農民は惨めなものだと。これでは放送では使えませんでした。決して差別用語ではなかった「百姓」が差別用語になってしまった。新たな差別を生んでしまったのです。教育つて難しいですね。

文太のむかし噺も・もう半分

(その一)

むかし農人橋のたもとに居酒屋があった。夫婦でやっていたが女房は今日生まれるか、明日生まれるかというお腹をしていた。

◇「もう半分……一杯いただくより半分ずつ飲んだほうが得をするように思ひましてなあ……」

もう半分のお爺さんは風呂敷に包んだ五十両を忘れて帰ってしまった。

◇

戻ってきたもう半分のお爺さん、「娘が身を売つたお金。お返しを願います」必死に頼んだが「そんな金、知らんがな」居酒屋の夫婦にお金をネコババされたもう半分のお爺さんは農人橋から身を投げて……

(つづく)

文昇問題 その一

巷で米不足と言われていた頃、米5kgで、仕事を依頼された。お世話になっている方からという事もあり、行かせていただいた。一

泊し、衣装の入ったリュックを背負い、左手にお土産、右手には大事な米を持ち、徳島から大阪まで帰ってきた。西梅田から地下鉄四つ橋線、衣装と米を網棚、お土産は膝の上に乗せ、座った。大国町で御堂筋線に乘換え、ドアが開まった時に荷物が少ないことに気づいた。米を忘れた。引き返し、駅員に、数分前に出た住之江公園行の2両目一つ目ドア付近の網棚に米を忘れた、と告げる。そこま

で覚えてるなら、忘れるな！と、聞こえてくる。途中、立ち寄った道の駅で、財布を拾い、届け出たというのに、私は米を失うとは。住之江公園駅へ連絡してもらったが、届け出なし。落胆し、帰宅しようとしたが、次に来た電車だけ確認しようと反対ホームへ。電車が入ってきた。米があった。乗っていた電車が、折り返してきたのだ。財布を届けていて良かった。情けは人の為ならず。

「あやめの女王様とお呼び」

私、桂あやめと女道楽の内海英華、ものまねのめぐまりこの3人で組んでる音曲漫才「オジョウサンズ」が、この度CDデビューいたしました！2曲カップリングで、まずは昭和歌謡ポップス「ふりむいてオジョウサン」。ザ・ピーナッツの♪振り向かないで♪的な曲調で、後ろ姿が美しいので「オジョウサン、こっち振り向いて」と声かけられ「ハーイ」と振り返ったら「ふりむかないで」と逃げられるという、落語「猿蓑家」の後ろから見たら「イヨ」前見たら「ポン」の鼓の掛け声みたいな歌です。もう1曲の演歌「もみほぐしてよ女旅」も、旅先で出会った人と

ええ感じになりかけたら逃げられて、♪お宿に帰ってマッサージ呼ぶ〜という、どちらも自虐ネタソングです。こういう歌をまじめに「年いった女芸人て気の毒ね」と受け取られたらツライですが、今の所どこで歌つても笑ってもらえてホッとしています。CD買わなくても今時は便利、スマホでダウンロードできるのでぜひ聞いて下さい！

坊枝の新婚日記

この夏の暑さも酷いものでエアコンなしでは暮らせない。家族が分散すると電気代が嵩むので、なるべく一つの部屋に集まるようにしている。

とは言っても、それぞれ生活サイクルが違うので録画をしたテレビドラマをリビングで長女が観て、次女が観て、妻が観る、妻に至ってはダレ場なのか毎回同じところで寝てしまい巻き戻しては何度も観るので5〜6回も観ると、長く家に居る私は職業柄、聞き覚えの習慣があるので細かいセリフまで覚えてしまう。

そして落語はどんどん忘れていく。

楽珍日記

休日の昼間、嫁さんから「掃除するから、2時間程家出て行ってくれへん？あんなおつたら邪魔やし」(何でワシがおつたら邪魔やねん！)と、一瞬ムツとしたが、すぐに2時間程、外でビール飲めるなあ……(⊙)と気持ち切り変え、心良く2つ返事で引き受けた。さっそく馴染みの酒屋で中缶6本入りのケースとつまみを買って公園のベンチに座って、一人酒盛。

季節は暑うなし、寒うなし、実にビールが美味しい！公園の遊具や砂場で遊ぶ子供たちを見ながら6本飲み、又追加で6本買って来て2時間程で12本全部飲み切った。さて、そろそろ家に帰ろうかと、空き缶の後片付けをしている時に、「おっちゃん！ハイどうぞ！」と先程まで遊んでた子供たち5、6人が、それぞれ手に空き缶を持ってニコニコしながら私の回りに集まって来た。

どうも私の事を、空き缶を集めて生活しているおっちゃんと思ひ込んでいるらしい(⊙)

まあ：仕方ないか：と苦笑いしながら「みんな！ありがとう！おっちゃん助かるわあ！空き缶持って帰るからね！ありがとう。」と元氣良く手を振って、肩を落として、さみしく家に帰った。

嫁さんに公園であつた話をする、大笑いした後、「でも良かったやん！その空き缶に、小銭入れらへんかっただけでも……」綺麗に掃除された部屋でまた、一人酒盛。

「枝曾丸のつれもてい」

私が主催する落語会では、古典と和歌山弁の2パターンで登場することが多いんです。和歌山弁落語は、おばちゃんスタイル。着物カッラを身に着ける。いわゆる女装をする訳ですが、これが最近ちよつとした世の中の流れに翻弄されていますね。

おばちゃん落語を世に出したのが、平成10年。今から28年前で、すっかり大昔である。当時、この設定を70代のおばちゃんにしました。昭和の時代ならギリ、お婆ちゃんと言っても可笑しくない70

代。ばってん荒川さんと桑原和男さん、青島幸男さんに代表されるような、あのカツラが一般的でしたので、私もトレードマークであるだけにオーダーメイドして先人たちのおばキャラカツラを模して作りました。そして今に至るまで劣化する度に同じカツラを作り続けてきましたが、ここに来て少し違和感をおぼえました。というのも、和歌山弁落語は現代創作落語…。この令和の時代にこの髪型はないやろう？という素朴な疑問でした。確かに昭和のホームドラマ、樹木希林さんのような頭をした人なんて、現在見ることもございませぬ。となるとこのカツラを変えなければと決意して、夜会巻きや極道の妻風など複数を仕入れ、今は以前のも加えると5種類を被りこなしています。高座は、全部新スタイルにして、それ以外の地元テレビやイベントは、今までのイメージも考慮して以前のままで出ることも。このような訳で、これからおばちゃんが出てきましたら、髪型も注目を！だいたい違和感あると思いますわ！

そりゃカミガタやなく和歌山弁で演ってますから…(汗)

ぼんぼ娘ピーのポンポコナー

人間、年齢を重ねると、生きていくコストが増えていく。食べもののひとつとっても若い頃は、知らない味の方が、多かったから何を食べても、感動出来たが、年を重ねてからは、高級なお肉やお魚を食べさせて頂く機会が増え、グルメになっていくのと引きかえに、感動に対して鈍化している気がする。又、宿泊施設ひとつとっても、若い頃はカブセルホテルの上段でも平気だったが、

今はカブセルなら下段しか怖くて泊まれないし、できる事なら少々高くてもビジネスホテルに泊まりたい。若い頃より生きていく為のコストがかかるのに、ギャンはまったく増えていないし、先の事を考えると、とても暗い気持ちになり、本当にみじめだ。その点、うちの師匠はすばらしい、73才にも関わらず東京では錦糸町の、一泊3800円のカブセルホテルを定宿にし、聞いてもないのに寒屋で、うれしそうに自慢してくる。又、それだけではあき足らず相撲の断髪式に行くのにカブセルの狭い通路で黒紋付に着替えてから、見栄をはって、両国までタクシーで移動する。本当に素晴らしい師匠だ。ただ修業の足りない私はタクシードライバの料金を足して両国のビジネスホテルに泊まればいいのと思っている。

文福のおいやすトリー

今から61年前「芸処名古屋」に、東海地方唯一の寄席「大須演芸場」が出来、東西の芸人の交流の場としても、栄え人気を博しました。若き日のツービートのご両人や明石家さんまさんも修行をした貴重な寄席でしたが、その後日に日に経営が悪化。「日本一、お客の知らない寄席」と異名をとり、お客様の教え方も、一人二人、大入りトホホー。私も50年以上前から縁を頂きたい出多き寄席です。その演芸場が50年の歴史を一旦閉じましたが、11年前に、地元の有志、そして、初代三平師匠の奥様「根岸のおかみさん」「海老名香葉子さん達のご尽力で、見事リニューアルし、再興10周年記念興業も大盛況で今も、寄席の灯を守っておられます。その演芸場で、22年程前にある「出合い」

がありました。現在の文福一門、四番弟子の「ぼんぼ娘」との「出合い」です。当時は東京、大阪から芸人さんをお呼び交通費もままならず、地元名古屋の芸人ばかり、その中に、浅草から流れて来たメイド漫談の「おさなぎ色」が居ました。地元の芸人さんは家から通うので、楽屋は席亭と彼女の二人だけ。楽屋には窓があってもガラスがなく、ベニヤ板、裸電球にせんべいぶとん、おまけにカギがない。冬の寒い夜などは、裏のホームレスが勝手に入って来て暖をとる状態「席亭、予算ないのはわかりますが用心のためカギをつけて下さい」「わかった」って外からカギをかけられ、監禁状態、それで1日2回舞台の強制労働があり「まるで刑務所みたいやな」と聞いたたら、彼女「いや、刑務所とちがって三食ごはん出ないんです」トホホー。そんな頃、毎年、8月のお盆興行は、上方から「露の團四郎(現三代目五郎)一座の怪談囃しの十日間、現在五九洛の団姫さんがデビューすることもあり、私は友人として露の新治さんと大須演芸場へ、陣中見舞。終演後、焼肉をごちそうしよう」と皆を誘う「おさなぎ色」が「行つてらっしゃいませ」「お前どうすんね？」「私は楽屋で佐野屋の二百円の弁当を」「ほなお前も来た見ええがな」「最初、彼女は私が芸の事ペラペラしゃべるので大阪のヤクザの芸能社の社長と思つてたらしい。途中で「あつた、小朝師匠の『大銀座落語祭』で出てた人だ」と思い出し意気投合。団四郎一行が大阪へ帰りしな、今年天に召された団六さんが「おい、おさなぎ、あの文福の兄貴に面倒みてもらうたええで」とのアドバイスで、しばらくは文福一座のメンバーとして、司会や漫談の「おさなぎ色」で私に付いていたが20年

前に、天満天神繁昌亭が、開席となるし、NHK朝ドラ「ちりとてちん」(女の子が落語家になっていくストーリー)がはじまるので、それを機に、正式に弟子となり「桂ぼんぼ娘」にしたがつて、繁昌亭開席第一号の嘶家になりました。

彼女は、浅草芸人時代、夫婦漫才の大御所、東京太・ゆめ子師匠の弟子として、8年程修行、いろんなしくじりもあり東京の浅草から名古屋そして大阪へと流れて来たのです。今から10年前「ぼんぼ娘」10周年W師匠に感謝の会」と題し繁昌亭で私と京太・ゆめ子師匠がゲスト。翌日彼女のやさしいご主人と可愛い娘さんと共に、京太・ゆめ子師匠に、京都見物してもらい、会食して、師匠が京都から新幹線に乗った時車内で、涙流されたとか…。今年の二十周年にもおよびと思いきや、すでに両師匠は、天国寄席名人会に…。

東西共に、男社会の落語界でした。江戸で三遊亭歌の多師、古今亭菊千代師、上方では露の都師、桂あやめ師らが女流の道をきりひらき、今や東京の寄席では、蝶花楼桃花師らが中心となり十日間落語色物すべて女流で公演、超満員。そんなおり、ぼんぼ娘もゲストで浅草演芸ホールに出して頂いたら、東京の芸人さん達「昔、出禁になった演芸ホールに、よく帰って来たね」と大歓迎されたとか、そんな彼女もうちへ来て10年ほどは古典をしても、うまくかみあわないなど悩んでいたの「お前は何か好きなんや？」「はい、セックスです」「わかった。ほな、その線で行け」どんな師弟や!!それからは、独自の「ピンク落語」で、のびのびと頑張っている現在。これからも、この「たぬき親子」の芸でお客さまが「ぼんぼちゃん」と腹をかかえて笑って頂けます

ようよろしゅうお願い致します。

編集後記

この号は、年末まであちこちで配布いたします。さて、季節のうへでは秋ですが、まだまだお暑うございます。ほんまにもう、日本の四季はおまへんなあ、秋が短かい。まあ、我々の一門、この新聞にはアキの来ないように、お願い致します。

さて、この度の熊本の地震、10年前に被災され復興のさなか、又、起きるとはね…。尊い命を亡くされた方々のご冥福を心より念じあげます。

千葉の豪雨もたいへんでしたね。今もなお、つらい避難生活を送られておられる方々に心から御見舞い申し上げます。ニュースを見ていて阪神淡路大震災、もう31年前ですよ、今だに体育館でござ寝、車中泊こんな状態のニュースを見て、この国は今まで何をしていたのかと思います。軍事費防衛費に湯水のごとお金を使ってるくせに…。特に今回被害の大きかった八代市は、今は亡き、名歌手の八代亜紀さんの出身地、熊本は水前寺清子さん、石川さゆりさん、島津亜矢さん等歌のうまい方が多く、私の好きな相撲では、佐田の海関、正代関、藤青雲関、義ノ富士関の関取衆、そして十両返り咲きをねらう貴健斗らが、居ますので、皆さん、それぞれの分野でいろいろ支援なさる事でしょう。

我々も、皆さんが少し落ちつかれましたら「心のいやし」に、落語で元気に笑って頂きたいと思ひます。停電、断水などのご苦労を見ていると、あたり前に使っている電気や冷たい水が飲めて温かい風呂に入れる事など、あらためて感謝しながら暮らしたいものです。

(文福)